

城北信用金庫所属のアスリート職員の原点を知る

ATHLETES ZERO

limited edition vol.2



スポットインタビュー

山田あゆみ

「悔しさで終らせない」

鈴木沙織

「諦めない強さ」

「平昌を振り返る」

レポート

Johoku Athletes Clubの取り組み



ATHLETES ZERO limited edition vol.2 2018年6月発行

text by Hiraka Hoshino / photographs by Aico Kawabe / designed by Megumi Imano / directed by Tomomi Oishi



城北信用金庫は、所属するアスリートを介して、スポーツの万能性への理解を深めることで、より豊かな社会づくりを目指します。

Webにて公開中

ATHLETES ZERO

アスリート職員による、日々の出来事や成長をつづったブログ等をご覧ください



Johoku Athletes Club

特設Webサイトにて、アスリート職員の活動報告をご覧ください



JOHOKU SHINKIN BANK

フェンシング・エペ

山田あゆみ



悔しさで終らせない

なぜアスリートの道を歩みはじめたのか。どのような思いでここまでできたのか。節目で響く母の言葉を素直に受け入れ突き進む山田選手。負けず嫌いな彼女の競技人生に迫ります。

PROFILE

山田あゆみ
Ayumi Yamada
1992年7月17日生まれ O型 三重県出身
【戦績】2016年 全日本フェンシング選手権大会
..... エペ個人 準優勝
2017年 全日本フェンシング選手権大会
..... エペ個人 優勝

1992年7月17日に三重県で生まれたあゆみちゃん。毎日泣いて幼稚園から帰ってくるようなちよっと泣き虫な女の子。そんな少女がフェンシングと出会ったのは小学4年生の頃。友達に誘われた地元のスポーツクラブに、弟と一緒に見学に行っただけだった。

習い事で多忙な少女時代 勝てない悔しさが持続力に

「母親は私たち姉弟に何かスポーツをやらせたかったようで、空手とかスイミングとかいろいろ習っていました。だけどセンスがないのか、どれも身につかなかったんです。フェンシングも自分から進んで始めたのではなくて、弟がやりたがった。じゃあ一緒にやってみようかな、くらいの軽い気持ちでした」

土曜と日曜の週2回、地元のスポーツクラブに通い、そのほかにもピアノや日本舞踊も習っていた。遊びたい盛り的小学生にとって、たくさん習い事を嫌に思う気持ちもあったが、母親はそう簡単には辞めることを許してくれなかった。

中学時代ではフェンシングとの両立を考え吹奏楽部へ入部する。クラリネットパートとして3年間過ごした。

「楽しさより、勝てない悔しさからフェンシングを続けていま



「気持ちがついて行かなくて、辞めるか悩んでいました」

したね。フェンシングは競技人口が少ないスポーツなので、エントリーすれば全国大会にすぐに出場できたんですけど、出たところで勝てなかった。なんでも上にはいけないのだから、すごく悔しい思いがありました。その頃から結果を出していたら、たぶんここまで続けずに辞めていただろうな」

母の一言でさっぱり癖卒業 努力の末に才能が開く

全国で勝てるような選手になりたいという思いから、フェンシング強豪校の三重県立鳥羽高等学校へ進学する。現役を退いたばかりの選手が顧問として指導に当たっていることもあり、練習は想像以上に厳しいものだった。

1年生の頃は何かと理由をつ

けて、部活をさぼっていた。2年生になってからもそんな状況が続いたある日、見かねた母親の次の一言が山田選手の闘志に火をつける。

「母親に『辞めるか、ちゃんとやるか、どちらかにはっきりしなさい』って言われたんです。そうしたら辞めるのが悔しくなっちゃって。辞める前にもう一度頑張ってみようかと思って、きつと負けず嫌いな性格が出たんじゃないかな」

そこから猛特訓が始まった。練習に毎日参加するのはもちろん、顧問に直談判して、マンツーマンのレッスンを受けた。

そんな努力が実を結び、急激に勝てるようになっていく。その年のインターハイで銅メダルを獲得、その後のジュニアオリ



「休みの日も先生につきっきりで指導してもらいました」

ンピックでも銀メダルに輝くと、アジア選手権と世界選手権の日本代表にそれぞれ選ばれた。

「やればできるじゃんっていうのに気付いた。長い間くすぶって、やっとここでエンジンがかかりました。辞めないでここまで続けてきて、本当によかったって思いました」

しかし、3年生のインターハイでまさかの出来事が起こる。フェンシングの「フルール」「エペ」「サーブル」の3種目のうち、彼女はフルールで日本代表に選ばれていたのだが、その種目で県予選に敗退してしまったのだ。どん底に落とされた気分を味わったが、ここで隠れていた才能が姿を現し始める。

「エペはインターハイの出場権を取れたので、そこからエペを猛練習しました。フルールで出場できなかった分、エペで優

勝するしかないと思っていました。けれども決勝の相手に全然歯が立たなかった。前年の銅メダルはずごく嬉しかったのに、1年後には銀メダルじゃ満足できなかった。金しか見ていなかったんです」

高校時代に全国優勝できなかった悔しさを晴らすために、そして日本代表として世界でも通用する選手になるために、日本大学への進学を決意する。もうフェンシングを続けることに迷いはなかった。

苦渋の決断がその後の 競技人生を変えた

「練習がきつくて、入って3日後悔しました。日大は日本一練習がきついことで有名。厳しいトレーニングを毎日夜の9時10時まで練習していました。立っていらなくなるまで筋トレしたり、炎天下の中40キロ走ったり……。今思い出しても苦しくなるような日々でした」

周りは全国から集まった逸材ばかり。メンバー争いは常に厳しかった。そんな中で山田選手はフルールとエペの2種目をやっていて、そのことに反感を持つ人もいたという。

山田選手のフルールの腕前はナショナルチームのコーチから注目されていて、彼女自身もフルールをやり続けたい気持ちが



第70回全日本フェンシング選手権大会。右が山田選手。

あった。しかし仲間からはその気持ちに認めてもらえず、監督からもエペに絞ってやって欲しいと言われていた。

フルールをとるかエペをとるか、苦渋の選択を迫られた。

「母親から『あなたは他の子と違って、器用にどっちもできるんだから、今だけエペに専念してみれば？』って言われて、そんな考えもあるんだなって。今は我慢して、また卒業したらフルールに戻ればいいや、エペを頑張ってみようって思えるようになっていました」

3年生になった山田選手はエペに集中することを決めた。そんな彼女を手厚く指導してくれたのは先輩や同期、後輩、そして弟だった。エペが面白く感じにくるにつれ、実力が磨きがかかった。ついには、高校3年生のインターハイ決勝で敗れた相手に

勝ち、全日本学生選手権大会で優勝を飾った。

「優勝したことで、エペで日本代表を狙える自信がついた。周りの人たちが一生懸命教えてくれたことが嬉しかったし、結果もついてきたのでエペに残ることを決めました。フルールはやっぱり諦められました」

大学生の頂点に立った山田選手だったが、卒業後も競技を続けることに迷いがあった。国内大会で優勝したからといって海外で通用するとは限らない。そんな彼女を後押ししたのはエペの仲間たちだった。

「周りは、私がオリンピックを当然目指すものだろうなと考えていたみたい。自分の競技レベルで続けていいのなら、オリンピックを目指して頑張ってみようと思いました」

2015年に城北信用金庫に入庫した後も、快進撃は続く。翌年の全日本選手権で銀に輝いた。そして2017年同大会では優勝を勝ち取り、堂々日本1位の座に輝いた。

「どうはいっても全日本。優勝にいつまでも浸ってはいけません。目指しているのはオリンピックでメダルを獲得すること。出るからには金がいいですね。ただ今は先を見すぎず、やるべきことをしっかりやっていきたい」

世界の頂点に向け、山田選手は躍進を続ける。

諦めない強さ

一大決心し美容師から再びスキーヤーに戻ったが、怪我や金銭的問題など次々と鈴木選手に試練が降り注ぐ。心が折れてもおかしくない状況に彼女は、どう向き合い、何を感じたのか。



フリースタイルスキー・ハーフパイプ 鈴木沙織

PROFILE
鈴木沙織
Saori Suzuki
1990年1月9日生まれ B型 山形県出身

【戦績】
2017年 シークレットガーデンワールドカップ 個人5位
2018年 平昌オリンピック 出場

小学5年生の時にアルペン競技を本格的にスタートした鈴木沙織は、地元のスキー名門校に進学し、練習漬けの毎日を送る。しかし、高校最後の年に出場したインターハイでまさかの転倒。卒業後は美容師となるも、スキーを諦めきれず復帰を決意する。

**超絶ジャンプに目を奪われ
新種目への転身を決意する**

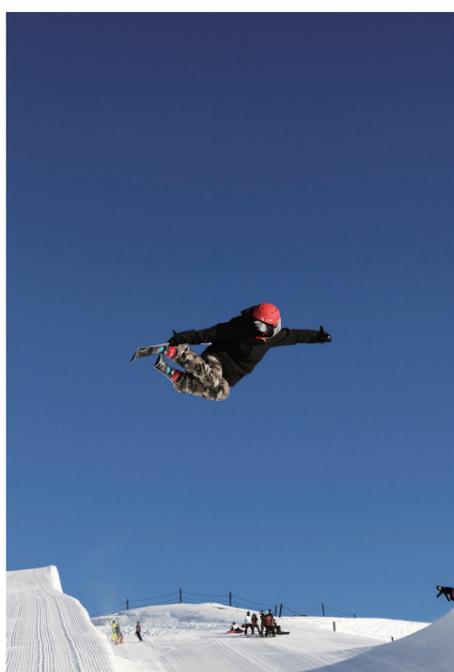
2年4か月のブランクはアルペン競技復帰を厳しくさせていた。大好きなスキーができるのなら種目は関係ない、どうせなら新しい競技に挑戦したいと考えた彼女は、パソコンで動画をチェックしていた時、フリースタイルスキー競技の一つ「スロースタイル」の辻麻衣子選手の出場映像に目を奪われた。

滑走タイムを競うアルペン競技に対して、フリースタイルスキー競技はターンやエアなどの技術を競う。スロースタイルは、障害物やジャンプ台を攻略しながら、練り出す技の難易度や完成度を評価する種目だ。

「あの動画を見たときに『これだ!』と思いました。辻選手は日本の女子の中でもずば抜けたジャンプ技術を持っています。彼女がどこで育って、誰に指導を受けているのか気になってネットで調べたら、白川塾の白川大助コーチに辿り着いたんです」



「空き時間があれば日雇いのバイトも入れていました」



ニュージーランド遠征。高さのあるジャンプが得意。

「次の試合で結果を出せばソチに出場できるかもしれない。でもその試合の遠征費を用意できない。精神的にも金銭的にも追い込まれていました。出られなくて悔しい半面、もうお金の心配をしなくていい安堵感もあって……。複雑な心境でした」

「治る怪我は大怪我じゃない。頑張りさえすれば復帰できるから。」



「怪我を経験する度にいい発見やいい出会いがあります」

10か月に及んだ辛い療養生活は、持ち前のポジティブさで積極的に取り組めた。そんな鈴木選手を支えたのは、家族やコーチ、そして応援してくれる周囲の人たちだった。

「私ってこんなに愛されていたんだなっていうのは、怪我をして気づきました。焦らずゆっくり自分を直そう。目標は次の平昌オリンピックだっていうことを再確認して、エンジンをかけ直しました」

300人を前に就職プレゼン 思いを受け止めてくれたのは

怪我を克服した鈴木選手は着実に実力を伸ばし、2016年にワールドカップ初出場を果たす。ところがその後、またも怪我を負ってしまう。彼女は約1か月半のリハビリ生活を送る傍ら、社会人としての自分を売り込むことを思いつく。

「今できることはなんだろうと考えた時、就職活動しかないと思いました。アルバイトをしながらの競技生活には限界を感じていたし、今後ずっとスキーを続けていくためには安定した生活を送る必要があります」

日本オリンピック委員会（JOC）の就職支援制度「アスナビ」を通じて、競技生活に理解のある企業の社員として働くことを希望する。最初の関門は、大勢

の採用担当者の前でのプレゼンテーション。スピーチに苦手意識を持っていた彼女は、時間を見つけては練習に励んだ。

「本番では約300人の前で自己PRしました。有難いことに数社から声をかけていただいて、城北信用金庫の熱意に心を打たれました。その後はトントン拍子に入庫が決まって。きつとタイミングも巡り合わせも良かったんですね」

安定した職を得たことで、時間とお金に余裕が生まれた。従来からこなししていたスキー技術のトレーニングだけでなく、怪我に強い身体を作るフィジカルトレーニングがメニューに加わった。十分な睡眠と食事を取る時間を確保できるようになったことも大きな変化だった。

「以前はトレーニングに行く交通費も出せないほど、カッパ

ツの生活を送っていました。今の私がこうして競技に専念できるのも、地域の皆さまや職員の皆さん、いろんな方々の支えがあるから。自分のためだけのスキーじゃないっていう思いがあるからこそ、頑張れています」

波乱万丈のスキー人生を送ってきた鈴木選手。憧れの舞台を経験した今、競技者として目指すものとは何なのか。

「今やるべきことを自信が持てるまでとことんやりたい。子どもたちにも『こんなに努力したから、ここまで来られたんだよ』って胸を張って言える……。そんな競技者になりたいと思います」

どんな困難が押し寄せても、前向きに立ち向かう強さが鈴木選手にはある。再び夢の舞台に立つために、今ある目標に向かって一歩ずつ着実に進んでいく。

Johoku Athletes Clubの取り組み

Johoku Athletes Clubの紹介

当金庫には陸上、カヌー、フェンシング、テコンドー、スキー、それぞれの競技で世界の頂点を目指している6名のアスリート職員が在籍しています。シーズンや活動拠点は違っても、チームとして同じ方向を向いて高みを目指したい。そして、城北信用金庫と地域社会の一員として、誇りと絆を大切にしていきたいという選手たちの思いが形となり、2016年Johoku Athletes Clubが設立されました。当クラブでは、競技活動はもちろんのこと地域イベントに参加し、地域の皆さまとふれあい、スポーツの魅力や社会的価値をお伝えする活動にも積極的に取り組んでいます。

参加した地域イベントの一部を紹介します

王子税務署 e-Tax 体験イベント

パソコンを利用して確定申告が誰でも簡単にできるというPRに協力をしました。



小学校にてアスリート交流会

北区立浮間小学校の児童を対象に、講演会と走り幅跳び教室を行いました。



2017大岡山フェスティバル

体力測定勝負やアスリート〇×クイズを企画し、イベントを盛り上げるお手伝いをしました。



Johoku Athletes Club
の活躍にぜひ
ご期待ください!!

鈴木沙織 平昌を振り返る



「2018年1月22日の代表選手発表会で名前が呼ばれた時の気持ちを聞かせてください。」
「平昌オリンピック出場は確定するのが遅かったので、もどかしさがありました。嬉しさより、これまでずっと支えていただいた皆さまに、やっといい報告ができる安心感の方が強かったです。」
「昨シーズン、怪我をされての調整は大変だったのでは。」
「怪我は完璧な状態に回復していませんでした。普通の人もりも膝はもろい状態で戦っていたので、これ以上怪我をしないよう細心の注意をはらっていました。ただ、オリンピックに合

わせていくために、難易度の高い、危険の伴う技にも挑戦しなければならなかった。難しいところではありました。身体を慣らしながら、少しずつ仕上げていきました。」
「これまでの試合と比べて、今回の雰囲気や緊張感はまったく違っていたのではないですか。」
「平昌に現地入りしてから予選当日まで3日間の練習期間があったんですけど、その間は緊張もなく、いつも通りの練習ができていました。けれども当日になって急に不安が押し寄せてきました。いつもなら技のクオリティーを考えて滑っているんですけど、あの時だけは、スタートしてからゴールするまで『みんな応援してくれているのに転んだらどうしよう、絶対転んじやいけない』っていう思いで頭がいっぱいでした。」
「予選直後に現場リポーターから声をかけられた際、泣きながら答える姿が印象的でした。」
「本日は転倒のリスクを避けるために、あえて難易度の低い技構成で挑みました。ただ、想像していたより点数が伸びなかったもので、2本目は決勝でやるつもりだった技構成に切り替えたんです。難易度を上げたから点数が上がるのは当たり前なんですけど、その分、成功させなければいけないというプレッシャーで、まとまりがなくな

ってしまいました。いつも通りに滑れば難易度を上げなくても決勝には絶対いける立ち位置だったので、1本目のクオリティーのまま2本目が飛べたら、予選は通過できていたと思います。焦っていつもの滑りができなかったのは、気持ちの弱さが原因かなとは思っています。」
「幾多の困難を乗り越えて夢をかなえた今、モチベーションに変化はありますか。」
「これまでを振り返ると、この4年間は、オリンピックのことを考えすぎてしまっていたなと思います。目標があった分、気持ちに表れたので、良かった部分もあると思いますが、次は4年後って言うよりも、1年1年やるべきことをして、1年で燃え尽きるくらい必死にやりたいですね。」
「最後に、応援してくれた方へのメッセージをお願いします。」
「自分の力だけではきつとここまで来ることができなかった。支えてくれた周りの人たちへの感謝の気持ちでいっぱいです。来年は2年に1度の世界選手権があるので、そこに照準を合わせて頑張りたい。今回の反省点は調整不足だと思うので、今はそれが1番の課題ですね。世界選手権までにやるのがなくなってしまうくらい、準備をしっかりしていきます。これからも応援よろしくお願いします!」